2025.11 ポスター
中津みらい月間
https://x.gd/B6ZzT

2025/11 中津みらい 月間
まなびの里 まちごとキャンパス

11月 毎週（土）（無料）
13:30 - 15:00

11/22（土）新博多町交流センター 13:30～16:00

「福澤諭吉を当時の人々はどう受け入れたか」－ 人びとは福沢諭吉をどう理解しただろうか －

内田茂男氏 千葉商科大学理事長

「福澤諭吉から学ぶ、まちおこしの文化」－ 福澤諭吉の考え方、まちおこしの文化とは －

影浦亮平氏 千葉商科大学准教授 国際センター長

プロフィール

影浦 亮平（かげうらりょうへい）

千葉商科大学准教授
1981年愛媛生まれ
京都大学総合人間学部卒業後、ストラスブール大学（フランス）で修士課程、博士課程を修了
博士（哲学）
稲盛財団、京都外国語大学、クエンカ大学（エクアドル）等を経て、21年から現職
専門は哲学・倫理学

福澤諭吉から学ぶ、まちおこしの文化

2025中津みらい月間「まなびの里 まちごとキャンパス」

2025年11月22日

千葉商科大学

影浦亮平

まちおこし

- 「まちおこし」という課題は、福澤諭吉の時代には存在しなかった。地方の過疎化は、工業化初期の時代には存在しなかった。
- しかし、日本国家そのものが極めて苦しい状況にあるというのが当時の福沢の見立てだった。福沢によれば、明治の日本は独立国家ではなかった。日本は植民地ではないが、西洋との通商に関する不平等条約のために実質的には半独立国家になってしまっていた。
- 日本の苦境を打開するための福沢の提案は、地方の苦境の打開にも役立つかも？

独立

- 日本の危機を打開するのに大切なのは、個人個人の独立であると福沢は考える。
- 福沢によれば、独立には二種類あり、『学問のすすめ』の第16編の言葉を用いれば、「有形の独立」と「無形の独立」が存在する。
- これらふたつの独立はすなわち、物質的（経済的）独立と精神的独立である。
- 福沢に従うと、経済的独立は精神的独立のための必要条件である（ただし、十分条件ではない）。
- （啓蒙思想家としては、個人の経済的独立の重要性を説く人は珍しい）

中津のまちおこしの鍵は、個人個人の独立か？

- 「一身独立して一国独立す」
- 日本が西洋諸国と交渉し、西洋諸国と対等の立場になるためには、役人だけではなく、国民一人一人が変わらないといけない。国民一人一人が、経済的・精神的独立を達成しないといけないと福沢は考える。
- 中津の衰退を打開するのも、個人個人の独立が重要ということになるだろうか？
- それを考えるには、個人個人の独立がなぜ日本の危機の打開につながるのかということに対する福沢の考えを理解する必要になる。

「一身独立して一国独立す」(1)

理由１【集団の構成員としての責任を引き受けない】

日本人は「市民」にならなければならないからである。ここで言う「市民」とは、戦時中に国家のために自分の身を捧げることができる人間ということである。

この市民意識を獲得するためには、物質的・精神的独立が必要である。他人に依存して生きている人間は、自分自身の問題を解決する責任が自分にあるとは感じていない。そのような人間が、自分自身の所属する国家を守る責任が自分にあるとは感じられない。戦争になれば、逃げだすことだろう。

「一身独立して一国独立す」(2)

- 理由２【ヨーロッパ人の要求を受け入れるのみ】
- 日本人とは西洋人たちと同等の立場で交渉できることが必要であるからだ。この交渉能力には、西洋人と日本人は同等であるという信念が必要である。
- 自らの独立を実現できていない人間は、他者に依存せずには生きられないため、自分自身の尊厳を信じることができない。貿易において、そのような日本人がヨーロッパ人と交渉すれば、ヨーロッパ人の要求を受け入れるのみになってしまう。交渉の中で自分の利益のための要求ができないので、大損をする。そしてこの損失は個人としての損失であるだけではなく、国家としての損失でもある。

「一身独立して一国独立す」(3)

- 理由３【自分の利益のためなら国益を害することも厭わない】
- 日本人は国益を考慮できなければならないからだ。他人に依存して生きている人間は他人の力を借りることに慣れているので、外国人の力を借りることも厭わない。自分の利益になれば、外国人にどれだけ日本の利益を掠め取られようと、他の日本人にどのような損失が出ようと、気にしない。国益よりも自分自身の利益を優先するのである。

一身独立して中津独立す？

- 以上の話は、人間集団一般にも妥当するか？
- (1)中津の構成員として、中津の存続を自分の責任として引き受けられる人間が必要か？
- (2)対等な関係を基本にして、外部の人間たちと協働できるコミュニケーション力を持った人間が必要か？
- (3)中津を自分の利益のための道具にしようとしない人間が必要か？
- 上の三つが当てはまる人間が中津のまちおこしに必要だとすれば、福沢の議論はいまだ参考になるに違いない。

実学のすすめ

- 福沢が『学問のすすめ』で提示する様々な論点は、基本的に個人個人が経済的に自立する上で必要不可欠なことに関することである。
- 福沢は実学を提唱するのは、実学が個々人の経済的自立を達成するための道具になるからである。

実学とは

- 福沢は、実学という概念で、漢学から洋学への転換を図ったが、洋学をそのまま実学とはしなかった。「洋学は成業したれども、なほも一個私立の活計をなし得ざる者は、時勢の学問に疎き人なり」（第2編）と福沢は主張している。つまり、自分の力で生計を立てられるようにできないのであれば、洋学ではあっても無意味だと福沢は考えているのである。
- 実際の生活の中で活用できてこそ、学問は実学であり得るのである。

儒教批判の文化論

- 福沢は実学を通じて儒教を批判する。
- それは、儒教の倫理思想が基本的に清貧思想であって、お金を稼ぐことや商業に対して敵意があり、それは個人個人の経済的独立の妨げになるからである。
- したがって、儒教文化の負の側面を明らかにし、儒教文化からいかに離脱すべきかという文化論を福沢は展開している。

恨み・嫉妬の文化の否定

- 儒教文化は、ひとを経済的独立のほうに向かわせず、他人に対する怨望、すなわち恨みのほうに走らせるということを福沢は主張する。怨望、すなわち恨みの問題について、福沢は『学問のすすめ』の第13 編で論じている。
- 怨望という感情は損得勘定を越えている。自分の不幸と他人の幸福を比較し、自分も幸福になること（すなわち自分の経済的独立）を目指そうとするものではなく、他人も自分と同じように不幸にしようとする感情だからである。

江戸時代の身分制由来の感情

- この感情は、お金稼ぎを嫌う儒教の精神文化に由来するだけではなく、儒教思想が反映されている社会制度にも由来していると福沢は見ている。身分・職業が固定されている社会においては、物質的独立を得ようといくら努力しても、その努力は報われないので、経済的成功のための努力が原理的にできない。そして恵まれた他者に対する嫉妬と恨みの感情だけが生じるということである。
- 福沢は、女性と身分の低い人間の取り扱いには困ると嘆く孔子のエピソードを取り上げつつ、その原因を作ったのは孔子自身、つまりは儒教であると非難している。

金銭欲の肯定

- 儒教文化の中で悪徳とされた金銭欲や奢侈を福沢は肯定し、価値転換を図った。金銭欲は経済的独立のために必要なものであり、奢侈は商業社会の成立に不可欠なものだからだ。
- 福沢は第13 編で、清貧と対をなす「貪吝」、すなわち金銭欲を肯定し、金銭欲は他人の自由を妨げない限りにおいて「人間の勉むべく美徳の一箇条」（第13 編）であるとする。金をたくさん稼ぐことに努めることは不道徳ではない。道 徳的な行為なのだ。

「富豪の進歩を妨る勿れ」(1883)

- 儒教文化の中では、富豪であっても、自分の富を隠して貧しいように装う必要がある。そして、莫大な収益が期待できるビジネスチャンスがあったとしても、世間を恐れて手が出せない。
- ここでも福沢は価値転換を説く。商人が富を得ることは、武人が戦場で功績をあげるのと変わらない。富があることは忌避すべきことではない。そして、富を持つ人間に攻撃したがる人間は、他人に嫉妬をするのをやめて、自ら、富を得ようと努めるべきである、と。

奢侈あるいは贅沢の肯定

- 個人の物質的な独立の実現のためには、何かを売って、金銭を得る必要がある。商業社会は、商業を盛んにし、物の売買の量を増大させる。商業社会においては、たくさんのものが売れる。たくさん物が売れるということは、たくさんお金を稼げるということである。たくさんの物が売れるためには、たくさんの買い手が必要である。したがって、商業社会の促進のためには、人間の購買欲を肯定する必要がある。生活必需品以外のものを購入する行為が「奢侈」、すなわち贅沢である。
- 奢侈は、儒教文化の中で「貪吝」と同様に不道徳とされた。奢侈について、『学問のすすめ』の第13編で福沢は価値転換を施している。福沢は奢侈については、金を稼いで、家計に問題のない範囲でたくさん使うのは「人間の美事」（第13編）だと論じる。奢侈は不道徳ではない。

「節約と奢侈」

- 奢侈の価値転換は商業社会にとって不可欠な購買欲のある消費者を確保しようとする意図が福沢にはあると見るべきである。
- 実際に、「節約と奢侈」(1887)では、奢侈が生産物の需要を喚起することで、社会に繁栄をもたらすことを福沢は強調する。
- 「今の文明の目的は奢侈に在り」とまで福沢は言っている。 奢侈に肯定的な商業社会の中でこそ、ものがたくさん売れるので、お金が稼ぎやすくなり、それぞれの人間が経済的自立を実現しやすくなると福沢は考えているのである。

殖産商売

- 国家主導ではなく、民間による経済の活性化を福沢は主張した。象徴的なのは、「殖産商売」や「殖産富国」といった「殖産何々」という表現である。「時事新報」で福沢が発表した数多くの論説の中で、「殖産何々」という表現を多数見つけることができる。しかし、同時に、福沢は当時の国是であるはずの「殖産興業」という表現は基本的に使っていないことがわかる。
- 「殖産興業」の国策でもって、当時の日本政府は生産量を増大させる（＝殖産）ために、国営企業の起業（＝興業）に力を入れていた。福沢は「殖産商売」といった表現を 使うことは好みつつも、「殖産興業」という言葉は好まなかったのは、「殖産」には賛成しても、国による「興業」には賛成していなかったことの表れであると解すべきだろう。

国の支援に依存しない経済へ

- 株の長期保有を勧める論説「鉄道財産」(1890)、「相場所の利用」(1893)、「小投機を制するは大投機を行ふに在り」(1894)の中での議論からも明らかなように、福沢は、民間投資により産業が成り立っていくことが理想であると考えている。
- また、米の不作による米価の高騰に対して、政府が先物取引に介入してその価格を下げさせた事案に対して批判を展開した論説「漫に米価の下落を祈る勿れ」(1890)に見られるように、政府による市場への干渉に対して福沢は批判的な論陣を張る。

まとめ：福沢の「まちおこし論」

- それぞれの経済的自立を促す
- そのために、実学が奨励されるべき
- 行政の支援は実学教育にあるべきで、補助金による産業支援等は推奨されない（補助金頼みの地域経済にしない）
- 経済的自立が促される文化の醸成（お金儲けに積極的になる文化・消費に積極的になる文化・地域の産業に投資する文化・あこがれは良しとし、嫉妬は醜いとする文化）
- 以上のことが実現できてくると、中津地域を支える人材を多数輩出することが期待できるようになる